ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.1 January 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

1

CONTENTS

・巻頭言
共同作業としての「対話」
／井上　昭洋 1

・天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」（9）
本連載における「翻訳」について ⑧
／加藤　匡人 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（17）
台湾伝道庁の設置とその背景
／山西　弘朗 3

・社会福祉からみる現代社会 ―天理教の社会福祉活動に向けて―（12）
社会的養護における天理教の社会福祉活動（2）
／深谷　弘和 4

・ライシテと天理教のフランス布教（34）
21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ④
／藤原　理人 5

・イスラームから見た世界（27）
イスラームの人間観①
／澤井　真 6

・コロンビアへの扉―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（31）
7. コロンビアの非日常 1：お祭りの話　その 3
／清水　直太郎 7

・おやさと研究所ニュース 8

スペインでの国際会議に参加／ 2023 年度宗教研究会を開催「アヴラム・デヴィッドソンのキプロスとトルコへの旅」

巻頭言

共同作業としての「対話」

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

北米の文化人類学の分野では、1980 年代中頃より、それまでの研究において人類学者の声が支配的であったことへの反省から、調査者（人類学者）とインフォーマント（ネイティブ）の「対話」を積極的に取り込むことで、解釈の生成プロセスを可視化させた民族誌が書かれるようになった。ポスト解釈人類学とも位置づけられるこの流れのなかで、幾つかの実験的民族誌が上梓された。

昆虫学者がフィールドで採集し標本箱に収める昆虫のように、宝石コレクターがフィールドで発掘し磨きをかける原石のように、人類学者の研究対象とする「文化」はフィールドに転がっているわけではない。調査者の解釈はフィールドでダイアロジックに、間主観的に形成される。そのことを考えれば民族誌への「対話」の導入は、必然であったのかもしれない。その後、1990 年代末より、それまで被調査者であったネイティブが人類学者として自らの文化を自らの言葉で語ろうとするネイティブ人類学、ネイティブと人類学者の協同による協同民族誌学など、文化のインサイダーとアウトサイダーの対立的な関係性を乗り越えようとする研究が展開されてきている。

文化人類学、特に民族誌学における方法論としての「対話」は、生身の人類学者とネイティブの間だけでなく、ネイティブ人類学者とその内なる他者との間でも成立する。前者においては、先に示した対話による民族誌的研究、調査者と被調査者による協同民族誌学研究が行われる。一方、より実行するのに困難を伴うのは、後者のネイティブ人類学の研究であろう。自らの文化をアウトサイダーとして語ること、人類学理論を文化のインサイダーとして用いること。そのようにして内なる他者を持ち続けることの困難性は、すでにこれまでの巻頭言で指摘してきた。

リアルな生身の人間同士の対話であれ、内なる他者との対話であれ、文化人類学において注目されてきた「対話」概念は、ますますその重要性を増している。ただし、リアルな対話であれば、それを生産的な共同作業として営むことのできる相手が必要になる。また、共同作業を営むことができたとしても、意見の対立を避けるような対話からは刺激的な結論は生まれないだろう。一方、内なる他者との対話においては、予定調和的な答えにしか辿り着けない可能性がより高くなるかもしれない。だからこそ、自身の信仰する宗教を研究する宗教学者や人類学者は自分のなかに Devil's advocate（悪魔の代弁者）を持つことをより真摯に考えねばならないと思う。

ところで、新たな天理教学の可能性を考える時、同様に「対話」の重要性が立ち上がってくる。信仰者の天理教学者と未信者の宗教学者との間でなされるリアルな対話が、最も容易に想定できる対話だろう。だが、ネイティブ宗教学としての天理教学を考える時、より重要となってくるのは、天理教を信仰する宗教学者（もしくは人類学者）が天理教学を営む際に、どのように内なる他者と対話するのかという問題である。

「元初まりの話」では、泥海のなかで月日両神が相談のうえ、人間をつくり、その陽気ぐらしをするのを見てともに楽しもうと、この世界を創造されたと説く。人間世界を創造すべく、くにとこたちのみこと（月・大竜）とをもたりのみこと（日・大蛇）の間でなされたこの「そふだん（相談）」こそが、究極の対話ではないだろうか。混沌のなかから月日親神が対話によりこの世界を創造したことに、自分の信仰する教えを自らの学問でダイアロジックに追究するモデル（雛形）は示されていたのではないかと思う。

それからハたしかせかいを初よと
神のそふだんしまりついたり　　六号 39